

年間第八主日（主日の福音を中心とする「靈的な読書」）

（一）聖書朗読

マタイ6：24-34

二人の主人に仕えることはできない。あなた方は、神と富とに仕えることはできない。自分の命のことで、また自分の体のことで何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと思い悩むな。鳥と野の花がどのように育つか、注意して見なさい。天の父はこれらのものが皆あなた方に必要なことをご存じである。信仰をもって、何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。明日のことまで思い悩むな。

（二）カテキズムの響き（カトリック教会のカテキズムの番号；YOUCHAT #520-522）

#305、

イエスは、子らの些細な必要にも心を配られる天の御父の摂理に対して、子としての信頼を寄せるように求めておられます。

#2113、2547、2632、2830

イエスは「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」といつておられます。偶像崇敬というのは、異教の誤った信仰に関することがらだけの問題ではありません。神でないものを神とすることです。それは、人間がある被造物を例えれば悪霊（悪霊崇拜）、権力、快楽、人種、祖先、国家、金銭などを、神のかわりに尊敬したり崇拜したりするときに必ず生じるものです。つまり、神が唯一の主であるとは認めないことです。富者は、有り余る持ち物のうちに慰めを見出しているから、天の国は心の貧しい人たちのものだからです（ルカ6：24）。実は、私たちに命をお与えになる御父は、生きるために必要な糧や時機に応じた物的、靈的善をすべてお与えにならないはずありません。イエスは、御父の摂理に協力する子供としてのこの信頼について力説して、様々な不安や心配から私たちを解放したいと望んでおられます。神の国とその義を求め、加えてすべてのものが与えられると信じることは、神の子らに相応しい一切放棄の姿です。すべては神のものなので、もしも神をないがしろにするようなことさえなければ、神とともに生きているものには、なにも欠けることはないのです。キリスト教的懇願の中心は、神の国の到来を望み、追求することです。願いには順位があって、まず神の国をついで、神の国を受け入れ、その到来に協力するために必要なものを願います。使徒パウロの祈りと教えのように、これは、教会の証の使命となり、また、使徒時代の教会の祈りの目的でした。すべての受洗者は、祈りによって神の国の到来のために尽くしているのです。

（三）カテキズムの学び（『コンペニディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

#592 「私たちの日ごとの糧を今日もお与えください」という願いの意味：

子としての信頼をこめた委託をもって、必要な日毎の糧を神に願うことによって、父である神があらゆる善良さを超えてどれほどを慈しみ深いかを求めます。

最後の祈り：共同祈願と主の祈り